

櫻井翁は、本村誌の編纂に就いては、その當初より陰に多大の賛助を與へられ、殊に本村誌の如きもその原稿全體に亘つて親しく校閲下され、校閲終了と同時に特に編纂員に宛て、「但馬國としては最初の村誌であるから、せい／＼努力して立派に仕上げられたいものである」と激勵の言葉を寄せられた。而も此の信書を發送されてより僅か三日にして發病され、遂に昭和六年七月十二日、八十九歳の高齡を以て溘焉として他界せられた。今や漸くにして本書成る。幽明遙に境を異にすと雖、必ずや、翁は來つて莞爾として之を照覽し給ふならむ。謹みて靈前に捧ぐ。

此村誌は衲の親友で資母村出身なる小畑源之助氏が淨財を投じて茲に上梓の運びに至つたといふ、之全く郷土愛の發露で寔に讚嘆の至りである。氏は帝國の實業界に雄飛し、傍ら但山の雅號を以て詩に畫に餘技を樂み、衲に取つては多年の畏友である。

又此村誌は但馬に於て最初のもので、先輩櫻井勉翁が親ら鑑閲せられ、翁終焉の數日前これが考査の爲に老軀を運んで中山に赴かれた程で、全く翁の最後の記念とも云ふべきである。

櫻井翁は小畑氏を介して屢々會談を求められ、衲も又郷土の大先輩として嚆教に接せんことを欲し、幾度か時を約して終に果さず、寔に千歳の遺憾である。

尙中山金藏寺は、衲の受業寺丹後の江西寺とは法類であつて、特に良谷和尙は江西寺の弟子で、衲の爲には法叔に當る關係から、衲は小僧時代に度々法要の手傳ひに金藏寺に行つたもので、此村誌を見るにつけ懷舊の情禁じ難きを覺ゆるのである。

如上の種々なる因縁により頼まるゝに任せて此題字を認め、併せて其の所以を手録した。(尾關本孝)